



ベラルーシ・ウクライナ福島調査団に参加して：
総合科学研究会講演録

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福島県立医科大学総合科学教育研究センター 公開日: 2017-11-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福田, 俊章 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000692

ベラルーシ・ウクライナ福島調査団に参加して¹

福田 俊章

福島県立医科大学医学部人間科学講座（人文社会科学）

要旨 報告者は福島県内の自治体関係者や実務家、研究者を中心に組織された「ベラルーシ・ウクライナ福島調査団」（2011年10月31日から11月7日）に参加して、チェルノブイリ原子力発電所事故で被災したベラルーシ共和国とウクライナにおける様々な取り組みと両国の現状を視察して来た。本報告ではその視察過程で報告者が考えたことや感じたことを率直に語ると共に、日本と両国との相違点の1例として耕作地のあり方や除染に対する考え方の違いを紹介する。

1. はじめに——チェルノブイリに行くことにして

まずは、2011年3月に福島第1原子力発電所事故が起きた時、報告者が何を思ったかを率直に語っておいた方がよかろう。報告者はこれまでも原発に懐疑的な思いをもっていたとはいえ、だからといってはっきりと原発に反対の意思表示をして来たわけではない。それを棚に上げて、今さら偉そうなことを言えたものではない。個人的にはそう思わずにはいらなかったのである。

実際、「今の自分は安全なのか？」という問いと「原発をこの先どうすべきか？」という問いとではその次元がまったく異なると言わなくてはならない。たとえ福島市にいる自分が安全でも、福島第1原発の構内で作業をしている人たちはかなりの危険を冒しているはずである。そうした人たちの危険の上に自分の「安全」はある。それは何も事故が起きてしまってから初めてそうだったのではない。元からずっとそ

うだったのである。

逆に言って、たとえ今の自分が「安全」だからと言って、原発の危うさがどこかに消えてしまったわけではない。反原発ないし脱原発を標榜するために「自分たち（あるいは、君たち）は危ない」と連呼するのはどこかおかしい。「自分たちが危ないから原発はいけない」のではない。「自分たちは安全でも、その自分たちの安全が他の人たちの犠牲の上に成り立っているから原発はおかしい」のである。そういう意味では、「自分たちが安全だからこそ、原発はおかしい」と言わなくてはならない。「『安全だ』と言う人間は原発推進派ないし容認派で、反原発派ないし脱原発派は『危ない』と言わなければいけない」かのような言説は思考停止に陥ってはいないだろうか。そうした言説の氾濫に報告者は2011年3月半ば以降、正直言って気が変になりそうであった。

そうしたところに、福島大学副学長（当時）の清水修二先生を団長とする「ベラルーシ・ウクライナ福島調査団」に参加しないかとのお誘いがあり、それに加わることにした。同調査団は2011年10月31日から11月7日の足かけ8日間にわたってチェルノブイリ原子力発電所事故で多大な被害を受けたベラルーシ共和国と当のチェルノブイリ原発が所在するウクライナの2ヶ国を訪問した。参加者は福

¹ 本稿は2012年6月13日に福島県立医科大学において開催された第23回総合科学研究会での報告を元にとまとめられたものである。当日は「行って来ましたチェルノブイリ～チェルノブイリ調査報告番外篇～」と題して、報告がなされた。

島県内の自治体関係者、農協や生協、森林組合、医療生協など生活協同組合関係者、福島県内を中心とした研究者など総勢31名であった（他に旅行者の添乗員の方、県内外の報道関係者が同行した）。

同調査団は様々な立場の人が参加しえた希有の調査団だったと言ってよい。しかし、その中で報告者は「戦力外」のような存在でしかなかった。そもそも被災者ではないし、放射線や医療、災害の専門家でもない。情けないことに、報告者は原発事故の「傍観者」でしかなかった。今回の調査団には1人の市民として参加することにしたのである。

そもそも、チェルノブイリに行って何が判るというのか。確かに、向こうに答など単純に転がっているはずがない。そもそも、人に「答を教えてもらおう」という態度は間違っていないだろうか。むしろ、向こうに答が転がっていないからこそ、わざわざ自分たちで調べに行くのだろう。模範解答が転がっているなら、それを手紙かメールで教えてもらえばすむのである。そう思いながら、現地に赴くことにした²。

2. 調査旅行の概要

はじめに、調査団の日程と訪問先を簡単にまとめておこう。2011年10月31日に成田空港を出発した調査団は空路モスクワ経由でベラルーシ共和国の首都ミンスクに入った。

11月1日はミンスクの国家非常事態省と国

² 本報告は同調査団の客観的な報告を意図したものではない。これについては、同調査団の公式報告書である『ベラルーシ・ウクライナ福島調査団報告書』（2013年6月）に譲りたい。本報告は同調査団に参加した1個人が向こうで何を考え、何を感じて来たかということの報告である。その内容に普遍性はないかもしれないが、偏頗な心が時として事柄の真実を映し出すこともあるのである。

家国境警備隊とを訪問、翌2日は陸路専用バスにてベラルーシ第二の都市で原発事故被害が深刻だったゴメリに移動し、当地にある国立放射線学研究所と放射線医学・人間生態研究所とを訪問した。3日にはチェルノブイリ原発からわずか20キロ弱ながらも奇蹟的に被災を免れたブラーギン地区コマリンに移動、コマリン中等学校併設地域情報センターやコマリン村地域病院を視察した。その後、調査団は陸路国境を越えてウクライナの首都キエフに入った。

11月4日はキエフ市内にある国立チェルノブイリ博物館と放射線医学研究所とを訪問し、翌5日は丸1日をかけてチェルノブイリ原子力発電所とその周辺を視察した。6日は原発事故で避難して来た人たちやその支援者たちで組織された市民団体「ゼムリヤキ」をキエフ郊外に訪問、交歓する機会をもつことが出来た。そして、その日のうちに帰国の途につき、キエフから空路再びモスクワ経由で11月7日の朝成田に戻ったのである。

さて、調査団はまずチェルノブイリ原子力発電所事故で最も深刻な被害を受けたベラルーシ共和国を訪れた。『「不思議の国」ベラルーシ』³という本があるが、まことにベラルーシは

³ 服部倫卓『不思議の国ベラルーシ ナショナリズムから遠く離れて』岩波書店、2004年。同書はベラルーシを訪れる機会を得た報告者にはきわめて興味深い一書であった。他にも、金澤茂、宮内尚、青森・チェルノブイリ子ども支援ネット『チェルノブイリへの小さな旅 ベラルーシ ウクライナ 原発事故被災地に行く』北の街社、1997年や金澤茂ほか『遥かなるチェルノブイリ 青森・チェルノブイリ子ども支援ネット 第五回支援・調査団の記録』北の街社、2003年は共に小冊ながらも著者たち共々はあるかなるチェルノブイリに思いを馳せざるをえなかった。両書には「とにかく記録を残す」ことの意義を改めて思わされた。なお、最近になって早坂眞理『ベラルーシ 境界領域の歴史学』彩流社、2013年なる書物も刊行されている。

「不思議の国」であった。街を歩いてみると、「1国丸ごと旧ソ連のテーマパーク」と言われたりする意味が判ったような気になる。1人1人の市民はどこかで「自分」を隠して生きているのではないか。そうした統制国家の風情を感じずにはいられなかった。アメリカ合衆国とは事実上は断交中であって、「英語の通じない国」というのも新鮮なものがある。もちろん、「マクドナルド」の支店も「トヨタ」の広告も皆無である。

首都 ミンスク（人口180万）は第二次世界大戦で市街をかなり破壊されたのだそうで、今の街は基本的に大戦後の再建らしい。整然とした街並みが続いていたが、それがどこか無表情で、映画のセットの中にでもいるような錯覚に陥ることがあった。美しくても、人工的でわざとらしく、普通の人間の息づかいがあまり感じられないということである⁴。

しかし、そのベラルーシという国に個人的には強烈な印象をもった。その気持ちをうまく説明するのは難しい。何と言ったらいいいのか判らないが、単純に「気に入った」というのではない。「気になる」という複雑な感情のような気がする。報告者のように思ったことは言わないと気がすまない人間にはさぞかし生きにくい国なのであろう（今でも国内ではKGBが活躍しているそうである）。他方で、いかに自分は普段、意味もなく贅沢なことをしているのかと

⁴ 服部前掲書によれば、ベラルーシ人は旧ソ連の諸民族中で最も典型的で模範的な「ソビエト人」だった。彼らほどソ連で居心地のよさを感じ、それ故に独立への準備が出来ていない民族もいなかった。ベラルーシ国民の民族・国民意識が弱いとしても、彼らがそのこと自体で不幸なわけではない。しかし、自意識や主体性を欠いているが故に、彼らがこれまで自分たちの利益を然るべく擁護して来られなかったのは間違いない。例えばチェルノブイリ原発事故の場合がそうだった。

思わずにはいられなかった。あるいは、権力との関係で言えば市民は強大な権力に統制されていると言わざるをえないのだが、市民どうしとの関係に目をやれば健気な人々の姿が目映る。およそパラダイスだとは思えないにしても、しかしそこに暮らす人々はいかにも清く正しく生きているように見えるのである。

これに比べると、次に訪れたウクライナにははっきりとした西欧志向を感じ取ることが出来た。「ロシア語が通じるちょっと風変わりな西欧の国」といった趣である。周知のように2004年の「オレンジ革命」以後、ウクライナは紆余曲折を経ながらも脱旧ソ連を志向しているなどと言われるが、なるほど確かにそれを実感することが出来た。「マクドナルド」も「トヨタ」も存在した（これには不覚にもホッとひと息ついてしまった）。キエフ市内では、小規模ながらもデモをする人の姿も見受けられたのである。

首都 キエフ（人口270万）の交通渋滞はひどかった。1人1人の市民が「自分」を主張し始めたものの、それを「自分たち」で調整して行く仕組みがまだうまく機能していないといった様子であった。ミンスクとは好対照と言うべきであろう⁵。

そうした個人的な感慨はともかくとして、両国を回りながら、「世界中の国がベラルーシのように質素なら、原発などそもそも要らないのではないか」と思ったりもしたものである。しかし、そのベラルーシも原発を建設するといふのだから話は厄介である。ここで、ベラルーシ

⁵ これらは所詮、1旅行者の感想でしかない。しかし、これらが真実をついているとするなら、そこには一筋縄では行かない厄介な問題が潜んでいる。強大な権力に押さえつけられている間はお互いに助け合いながら美しく生きて行ける人間も、自分たちを押さえつけるものがなくなると途端に足の引っ張り合いを始めてしまうということなのであろうか。

とウクライナ両国の電力事情⁶を簡単に見ておきたい。

ベラルーシには現状では原発が1基もなく、エネルギーのほぼ100%を火力発電に頼っているのだそうである（元来、ミンスク近郊に原発の建設が決まっていたが、チェルノブイリ原発事故で中止されたという経緯がある）。燃料の大半はロシアから輸入する化石燃料（石油やガス）である。これではいけないというわけで、ロシアへの過度の依存から脱却すべく、同国北部のオストロヴェツという所に初の原発を建設することが決まっている。もっとも、その建設と燃料供給はこれまたロシア頼みという点がベラルーシの悩み所と言わなくてはならない。

ウクライナは原発依存度が高い。チェルノブイリ原発が稼働を停止した現在⁷でも、4箇所の原発で15の原子炉が稼働しており、原発依存度は50%近いそうである。

ここから、両国の原発に対していただく感情が両義的であろうことが容易に想像できる。調査旅行中、原発そのものの当否を正面から問い尋ねる機会はほとんどなかったが、例えばベラルーシ政府の公式レクチャーは「ベラルーシはチェルノブイリ原発事故からの回復と復興の段階を終えて、新たに経済発展する次の段階に入った」ということを強調するものであった。「原発事故はもはや過去のものとなった」と言いたいわけで、そこには「原発事故が起きては困るが、原発そのものを否定するわけには行かない」という気持ちがにじみ出ているように感じ

⁶ 服部倫卓『ウクライナ・ベラルーシ・モルドバ経済図説』東洋書店、2011年。

⁷ チェルノブイリ原発は1986年に事故を起こした後、一部原子炉は運転を続け、最終的に全機が運転を停止したのは2000年のことであった。現在でも原子炉の管理や廃炉作業のために3500人ほどの人が働いていると言われる。

られた。

3. チェルノブイリ原発とプリピャチの町——不思議な「安らぎ」

さて、チェルノブイリ原発を訪問したのは11月5日のことであった。その静謐な空気感、はきわめて印象的で、伝え聞く事故の悲惨さとの大きな落差に複雑な思いを禁じえなかった。天国と墓場は共に「安らぎ」の場として地続きだということなのであろうか。その後新シェルター建設が始まって、時折報道される同地の写真を見ると、そこには工事現場のような雑然とした雰囲気を感じ取れる。今行くと印象はまた随分と違うかもしれない。

30キロの立入禁止区域に入って程ない所にはチェルノブイリ市がある。同市は古くからある町だというが（つまり、チェルノブイリ原発が出来たのはるか前から存在していた）、事故後普通の市民は住んでいない。チェルノブイリ原発に勤める人たちがここに宿泊して、ここから原発に通っているのだそうである。そして、原発で数日働いたら禁止区域の圏外に出て休養を取り、また仕事に戻るということを繰り返しているらしい。

そのかつてはグラウンドだった所が今は空き地になっている。そこには事故の収束活動に用いられて、そのまま放棄された装甲車が展示されていた。その奥には、今でも現役で使われている教会（ウクライナ正教会の教会であろうか）を臨み見ることが出来る。この町に宿泊している原発作業員たちが日曜日にはここでミサに寄るのだそうである。この町にかつて住んでいた人たちが日曜日にだけここにやって来るということもあるらしい。教会の建物が現役であることは遠目にも判る。軍用車と宗教施設の対照は何とも奇妙と言うか、印象的な光景である（意図的にそうしたもののなのであろうか）。

それに何を感じるかはそれこそ人によって様々だろう。報告者は軍用車と教会、つまりは戦争と平和、ひいては原爆と原発は所詮やはり地続きなのだと感じずにはいられなかった。

原発 訪問後、そこから数キロの廃虚プリピャチの町に立ち寄った。この町はチェルノブイリ原発の従業員とその家族が住むために

1970年に⁸建設された新しい街だが、現在では完全に無人の町になっている。廃虚となったアパート群や遊園地の観覧車などその写真を目にした方も多かろう。当日は快晴無風で、黄葉した葉が落ちて地面に散らばっていた。「黄金の秋」の最後の一瞬に立ち会うことが出来たという趣である。もしかしたら、当地が1年で最も美しい日に当たったのかもしれない。不謹慎の謗りを免れないかもしれないが、まさしく「チェルノブイリ日和」であった。

プリピャチでは、8階建てホテルの廃虚にも上らせてくれる。しかし、報告者は高所恐怖症なので、4階までしか上がることが出来なかった。他の人たちが上まで上がって、下に降りて来るまでの間、自分は廃虚プリピャチで1人きりであった。時間は5分か、長くても10分くらいのものであろう。しかし、報告者にはまるで時間が止まったかのように感じられた。人の声は聞こえず、風の音さえ聞こえて来ない。そのひと時に不思議な「安らぎ」を覚えずにはいられなかった。もしかしたら、ここが自分の「ふるさと」なのかもしれないとさえ思った。この瞬間に出会うために自分は調査旅行に参加したのだろうし、次にまた人生を繰り返すとしたらまたこの瞬間に立ち会うために自分は人生を歩むのであろう。「永劫回帰」とはそういうこ

⁸ ちなみに、同原発の1号炉が営業運転を開始したのは1977年、4号炉が営業運転を開始したのが1984年のことで、そのわずか25ヶ月後の1986年4月26日に4号炉が事故を起こしている。

とを言うのである。

4. 日本と現地との相違点——除染の当否と耕作地のあり方

さて、主観的な感傷はこれくらいにして、1つだけ客観性のある話をしておこう。日本と現地との相違点の1例として、除染の当否と耕作地のあり方をめぐる話をしておきたい。

現地では、「除染はしても意味がない。日本でもやらない方がよい」とあちこちで言われた。これはベラルーシかウクライナかを選ばない。例えばウクライナ放射線医学研究所での意見交換（11月4日）で調査団が「やらなかった方がよかったことは何かなかったか？」と聞いたところ、「それはいい質問だ。これまで『何をすべきか』はさんざん聞かれたが、『何をすべきでないか』を聞かれたのは初めてだ。除染はすべきではない」という答が帰って来たのである。

もちろん、まったく除染が行なわれなかったというのではない。当のチェルノブイリ原発はそのまま遺棄するわけにも行かないのだから（原子炉の制御は続けなくてはならない）、然るべき措置は講じられたようである。現在、原発管理棟周辺は厚さ数メートルのコンクリートで覆われていたりするらしい。あるいは、汚染された家屋を取り壊して「埋葬する」といったことは向こうでも行なわれている。しかし、日本で考えられているような「住民の帰還と生活再建を促す」ための除染など行なわれていないようなのである。

では、どうして現地では日本で考えられているような除染が行なわれなかったのか。それには様々な理由が考えられる（以下に掲げることの中には、現地で聞き取ったことを元に報告者が推測したことも含まれているので、その点で留保を付けた上で読みたい）。

まずは、「お金がなかったから」である。次に、「効果的な除染方法が見つからなかったから」である。この2つは合わせて、「費用対効果の点で見合わなかったから」と言い替えてもいいかもしれない。さらには、「国土が広いので、汚染地を放棄して新天地に移住した方が手取り早かったから（あるいは、そうした方が放射線被曝を確実に回避できたから）」という理由もありそうである。

また、「土地公有制で私有地などなかったので、移住を強制しやすかったから」というのも大きそうである。これは日本と現地との相違点として特筆大書しておかなければならない。現地の政府は避難民に新たな住みかど仕事を確保する責任は有していても（共産圏ならば失業はない立て前であるし）、私有地への帰還など保証する必要はない（そもそも私有地などないのだから）わけなのである。

さらには、彼我の相違点としてもう1つ指摘しておかなくてはならないことがある。それは「農地や山林のあり方が日本とは根本的に違うので、現地では無理に除染をする必要がなかった」ようなのである。この点についてはいま少し詳しく述べることにしよう。

現地では、どこまでも広大な平地が広がっている。その平地の所々にこれまた平べったい森林が分布していた。日本のように傾斜地に広がる山林を目にすることはなかった。これは現地に赴いた日本人の誰もが実感することのようで、向こうはとにかく平べったい⁹。個人的には、

⁹ モンゴルやオーストラリアあたりを旅してもそうした印象をもつことがあるのかもしれないが、報告者はモンゴル高原やオーストラリア大陸を訪れたことがない。子どもの頃に大陸横断鉄道で通ったアメリカ合衆国のモンタナ州やサウスダコタ州もだだっ広かった記憶があるが、平べったいという点ではベラルーシの方が上である。バスでの移動と大陸横断鉄道での移動では見え方や感じ方が違って来るといってもあろうが、アメリカ合衆国の西部は

これがロシア文学に言う「母なる大地」のことなのかと思ったものである。向こうでは「大地」が更地のまま、むき出しになっている。これに比べると、日本では「大地」の上に丘やら山やらあれこれ乗っかっているという印象である。

この耕作地のあり方の違いというのはやはり大きい。日本では、田圃の背後に山林が控えていて、背後の山林から沢水が田圃に流れ落ちていたりする。山林が放射性物質で汚れていては、田圃も汚れてしまう。田圃を綺麗にするためには山林も綺麗にしなければならないといったことになる。

ところが、現地ではどこまでも平べったい土地に樹木が生えている。そこでは、上述した日本のような問題は生じない。森林は放射性物質をため込んでおいてくれるので、むしろ「変にいじらずにそっとしておいた方がよい」ということのようなのである。山火事をかなり警戒している様子があったが、これも火事によって放射性物質が飛散するのを避けたいかららしい。裏山から放射性物質が流れ落ちて来るといったことは問題ではない。

現地 が「平べったい」ということは知識として判っていたつもりでも、知識として知っていると実際に行って体感して来るとではやはり決定的に違う。逆に、向こうの人が日本の耕作地のあり方を実感できないのも無理はあるまいと思われた。

5. 現地の施策で学ぶべきこと

このように、現地と日本とではいろいろと事情が違う。現地で行なわれた方策をそのまま日本に直輸入してもうまく行く保証などない。だからこそ、実際に現地に赴いて、現地を見て来

「広い」が、ベラルーシはとにかく「平べったい」のである。

ようというのだった。しかし、現地に学ぶべきことももちろん少なくはなかった。それを簡単に確認しておこう。

まず、「最終的に半減期の到来に期待する」という現地の人たちの態度を嗤うことは出来ない。我々は本質的に人間の手には負えないものを扱っていることを忘れてはいけない。原子力を人為的に操作できると思い込むことがそもそも傲慢だったのである。これは事故が起きようが起きまいが変わらない。たとえ事故が起きなくても、後には放射性廃棄物が残る。この廃棄物は結局のところ自然に減衰するのを待つしかないのである。

次に、日本では「除染」という言葉がいささか一人歩きしてはいないだろうか。我々はこの先も長く放射線被曝と付き合っていかなければならない。病気にたとえるのは適切ではないかもしれないが、我々は「急性病」ではなく、「慢性病」に罹患したのである。病気が治ったら社会復帰する（逆に言って、病気が治るまでは社会復帰しない）のではなく、病気と付き合いつつ日常生活を送って行かなくてはならない。除染をするなら、効果的な除染をすべきだろう（そして、効果的な除染がないとは報告者も思わない）。

また、「検査機関や研究機関を汚染地域（の近く）に置く」という方針も傾聴に値する。例えばベラルーシでは関係機関を首都ミンスクではなく、汚染地域に位置するゴメリに置いている。これにはこれで裏がありそうだが、それとは切り離してこの施策は考慮に値する。福島で採取した検体を東京の研究施設で分析してその結果だけを福島に知らせるといったことではなく、福島のごときは地元福島で調べるといった形を取ることが望ましい。

さらに言うならば、「自分たちで調べて、自分たちで納得する」という態度が必要である。これまたベラルーシの例であるが、向こうでは

住民が持ち込む農産物の放射線測定や放射線に関する情報を提供する活動を行なう情報センターがしばしば小学校や公民館の中に設けられている。そこでは、子どもたち自身が食品の放射線量を測るなどしている。それが「安心」と「納得」につながるのである。日本でも農家による田圃の放射線量調査に消費者代表も参加してもらったらどうかというアイデアが調査団員の農協関係者から出ていたが、聞くべき意見だと思われた。

6. 最後に——将来につなげるために

今回の調査は「向こうが見せたがっているものを見て来た」というものであった。いわば玄関から入って応接間に通されたような調査だったということである。今回見て来たものはあくまでも「立て前」であって、実際は必ずしもこの通りには行っていないことも当然ながらあるようである。あるいは、「裏」が潜んでいる場合もありそうである。

しかし、こうした訪問の機会を積み重ねて行くことが大切なのではあるまいか。実際、その後現地を訪れた他の視察団は我々の調査団が訪問できなかった施設を訪れている¹⁰。たとえそこでの応答が紋切り型のものであったとしても、訪れることが出来たという点をまずは評価すべきである。その上で、個々の調査団の成果の共有ということも考えなくてはなるまい。さもなければ、「訪問の積み重ね」にならない。我々の調査団の場合、公式報告書の取りまとめが遅れに遅れたことはやはり大いに反省しなければならない。

¹⁰ 例えば、2012年11月21日から27日までの日程でベラルーシを訪れた福島市の市民放射線対策先進地視察団はミンスク市内の小児がんセンターや児童保養施設を訪れている。いずれも我々の調査団が訪問できなかった施設である。

報告者としては、次に行く機会があればぜひとも裏木戸から入って、縁側に座ってお茶でも飲みながら現地の人たちと話をしてほしいものだと考えている。その時、「福島ではその後、こんなことをやって効果を上げています」という土産話の1つも出来るよう、自分も何かやれることを見つけてやりたいと思う¹¹。

¹¹ その先には「原子力発電所事故のように個人の責任を越えているとしか思えないような大きな出来事に対して、では個人はどう対処したらいいのか」という大きな問題が控えているが、それについて私見を披露する機会是他日を期すこととしたい。